

---

# こいかぜっ！

荻野斎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「いかせつ！」

### 【著者名】

Z4638Y

### 【作者名】

荻野斎

### 【あらすじ】

恋の風吹ぐ、四月の春。僕は葉山学院に入学する。そこで出会うのは一人の少女。我儘で、乱暴で、横暴な少女。多分僕は、彼女と出会って何か変わらんだろう。と、思えなくもない。

## プロローグ～恋の讃（前書き）

恋愛経験のなさに定評のある、春嶺愁？です。どうも、恋愛小説です。ハラハラです。よろしければ読んでいく下さい。

## プロローグ 恋の詩

命短し 人よ 恋せよ - 前田慶次

\*\*\*

人間は皆恋する。

我儘な人も、偏屈な人も、淑やかな人も、内気な人も、強気な人も皆恋する。

失恋したつて、叶わぬ恋だと知つたつて、恋をする事を辞められない。

それは恋の不思議な魅力。

苦しみも、悲しみも、飲み込んで虜にする、恋の魅力。

砂糖みたいに、ケーキみたいに甘い魅力。

渦の様な、巻き込まれたら逃げる事の出来ない魅力。

麻薬の様な、病みつきになる魅力。

それには人間は取り憑かれるのだ。

取り憑かれ、振り回され、悩み、悔やむ。

それでも人は恋をする。

だからいつかは、きっと出会える。

何年経っても何十年経っても、きっと出会える。

諦めたくなつて、手放しそうになつても、きっと出会える。

「「本当に出会うべき、一番の恋人に」」

絶対、出会える、いつの日か。

## 1・あさ（前書き）

朝には納豆を欠かさない、憲権愁？です。僕はねばねば大好きっ子なのです。プロローグを抜いて、一話目になりますがよろしければ読んでください。

愛する、ただひたすらに愛するところと、何とこう行き詰まりだらう。・サン＝テグジュペリ

小鳥が<sup>さわざ</sup>轟つてゐる。これは朝の知らせ。僕に目覚めると言つてゐに違ひない。

僕の愛用の目覚まし時計も騒音を巻き散らかし、僕を目覚めさせようとしている。

しかし、だ。

僕は目覚まし時計のスイッチをオフにして、くたばりやつた声で咳く。

「後、五分だけ……。眠らせてくれ……」

「はいだめー。お兄ちゃん起きるー！」

僕は眠たい臉を擦り、目を開く。

「何だ……楓か」

「何だとは何よ。起こしに来た妹に向かつて

僕の妹、ついでに初春家の長女である初春楓。<sup>はつはるかえで</sup>初春は、ついはあると読まないよう気を付ける事。

初春家の母親的存在であり、プロ顔負けの料理スキルや掃除スキルを持つ、中学二年生だ。近所のおばさんにも評判が良く、『益々綺麗になって』とか『楓ちゃんの料理は上手ねー』とかべた褒めされている。

今度の楓はエプロン姿だつた。料理をしたいた事が服装から伺える。やっぱり、楓にエプロンは似合つた。本当にお母さんみたいだ。

今日はどひやら、あまりに遅くまで眠つてゐる僕を起こしに来てくれたらしい。まあ、毎日起こしてもらつてるけどさ。

「楓、頼むから後五分だけ眼させてくれ」

「お兄ちゃんは絶対五分で起きないから駄目です。良いから起きる

の…起きないなら布団と一緒に皮膚を剥ぐよ?」

可愛い顔で恐ろしい事を言う奴だった。しかも笑顔で言っている。

軽く恐喝である。

笑いながら恐喝とか、楓さん半端ないつす。笑顔で就活…みたいに感じで笑顔で恐喝！

僕としては、皮膚を剥がれるのは御免被りたいので、大人しく楓の言つとおりにする。

妹に逆らえない兄。

なんて情けない構図だ。情けなさ過ぎて泣けてくるよ。

「お兄ちゃん、たまには部屋でも掃除したら?・すつ・じに汚いよ

「僕の部屋は汚いんじゃない。いつでも物が取れるように、わざと散らかしてるんだ」

「そういうのって本当に部屋を掃除しない人が言う事だと思つんだけど……」

五月蠅い。

漫画面本が積み重なつていたり、菓子のゴミ袋やペットボトルが散乱していたり、服がそこらへんに投げられ、カーペットに染みが付いていたりする部屋の、何処が汚いというんだ。

汚さを表現したような部屋だけど、上手く言いかえれば便利な部屋へと一変するのだ。これが言葉の力。言葉つて素晴らしい。

そう言えば、と僕は楓に質問をする。長女もいれば次女もいる、という事で。

「蕪は起きてんのか?あいつが一番お寝坊さんだろ」

初春<sup>はつはる</sup>蕪<sup>かぶら</sup>は僕の妹で、ついでに初春家の次女だ。活潑的で、年がら年中騒いでいるような奴である。落ち着きが無く、毎日擦り傷を作つて帰つてくるような奴である。

小学五年生になつたんだから、もう少しげらり落着きを持つて欲しいんだけどな。その願いが叶う日は今のところ未定である。そんだけ動けば良く寝るのも頷ける。

「蕪は今から起こしに行くの。あの子は起こすのが厄介だからね。

先に簡単なお兄ちゃんから起きしに来たのだ

「ほう」

どうやら楓の中での僕の認識は、簡単な奴らしい。

少しショックだ。少しだけど。

「じゃあ私、起こしに行くから、お兄ちゃんは顔洗つて、寝癖も直して、十分間歯磨きして、そうしたら一階に降りてきて」

「な、何でそこまでしなきゃならないんだ？歯磨きとか五分ぐらいで良いだろ」

「ダメよ！一生に一度の、お兄ちゃんの高校の入学式なんだから！身嗜み完璧にしなきゃダメなの！」

そう言い放つて楓は僕の部屋から出ていった。

そう。

今日の日付は四月の五日。

曜日は月曜日。

春の陽気が暖かい、気持ちの良い晴れの日。  
はつはるひこのひ

初春格の入学式である。

「ふあ～」

けれど、眠たくて僕は、欠伸をした。

## 2・ねこ（前書き）

寄生獣と刃牙シリーズが大好きな、憲樞愁？です。ニギーのために、目下鞭打の練習中です。嘘です。でも漫画は好きです。三話もようしければ読んでください。

「よおっ、柊！朝から辛氣くせえ顔してんな！」

家を出て、今日初めて通う事になる、葉山学院に足を進めていると後ろから声をかけられた。

僕の友人と<sup>こみなかはかり</sup>言うか幼馴染みと言つか親友と言つか、そう言つた存在の、小南計<sup>こみなみはかり</sup>だ。

小学校からの仲で、中学、そして高校も一緒に通う事になつた、僕の親友だ。

性格はお調子者で、問題を起こすことも多々あるが、基本的には情に厚く優しい。そんな性格だ。僕とは全く正反対な性格だが、何故か気が合う。

こいつにも妹がいて、僕の妹の楓と幼馴染みだ。

兄妹そろつて幼馴染みなのだ。

別に家が近いとかそういう訳じやないんだけだな。気付いたら、仲良くなつていた。そういう友情があつても良い筈だ。

「よつ、計。今日も朝から元気だな」

「おうよ！俺の座右の銘は『元気だけが取り柄』だからな！」

何とも悲しい座右の銘だつた。だけど、計にはぴつたりだと思つた。確かにこいつは、五年に一度風邪をひくかひかないかくらいの、タフさを持っている男なのだ。

あれだ、バケツ一杯の水に果糖を入れて飲み干したりできる奴だ。うん、それはさすがに無理かな。烈王ぐらいにしかできない芸當だな。

「それにしてもだな。一か月前まで最高学年だつたつてのに、今は

もう最低学年か。なんか変な感じだよな

「まあな。それでも、一年生だから味わえる事いつぱいあるぜ？」

たとえば、先輩と呼ぶ事。

たとえば、学校で迷う事。

たとえば、先輩に教えを請う事。

一年生だからこそできる事だ。三年生では決してできない事だ。

「そうだな。それに、この制服のブカブカ感って言つのか？それが味わえるのも一年生の特権だよなあ。本当に、懐かしいのに新鮮な感覚だよ」

懐かしいのに新鮮つてのも変な話だけどな、と計は付け足した。  
確かに変だけど、分かるよその気持ち。

懐かしすぎて、逆に新鮮に感じる、あの不思議な感覚。

あれは嫌いじゃない。むしろ、好きだ。

人はあの感覚を覚えてる限り、いつまでも幸せに感じられる。そんな気がして止まないのだ。

「ん。猫だ」

計が立ち止まりそう言つた。

確かに猫だ。蜜柑箱に入れられ、捨てられた猫。

捨て猫なんて、本当にいるもんなんだな。猫みたいに自由きままに生活する動物、捨てられても自分でどこかに行ってしまつかと思っていたのに。違うんだ。

猫でも待つてるんだ。大好きな主人を、待ち続けるんだ。帰つてくるはずが無いのに、帰つてこないのに、それを知らず、待ち続けている。

なんて健気で、可哀そなんだろう。

僕も猫を飼つてゐる。さつきは紹介しなかつたけど、クロと言つ、可愛らしい一匹の猫を飼つている。

猫を飼つている僕には、捨て猫の事がより一層可哀そに感じられた。

「酷いな……。捨てるぐらいなら飼わなきゃいいのに。飼い主の勝手で、捨てたり育てたりされる猫の気持ちは、一体どうなんだろうな」

「最初は楽しいんだよ。楽しくて楽しくて、飼えるような気分になつてくる。でも、だんだん飽きてくるんだ。飽きて飽きて、いづれ

か、いざれか……鬱陶しくなつて捨てちやうんだ

僕は一体、誰と比べていいん?

誰と猫を重ねていいんだ?

分かつて。僕が重ねていいのは -。

「……そつか。よし行こう。登校初日に遅刻するのも悪いだらう、  
なにより、これ以上こいつに余計な期待を持たせるのは良くない」

「分かつた。分かつたよ」

じゃあな、と僕は猫の頭を撫でる。そして、こやあこやあと悲しく鳴き続ける猫を置き去りにして、その場を去つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4638y/>

---

こいかぜっ！

2011年11月17日18時41分発行